



中村俊定文庫
文庫 18
948



「原本寸法」
「中」也

久泥麻之良

「



明和丁か〜〜此毒母父の〜せ〜ら〜
 さ〜〜ゆま〜あ〜る朝ゆふ向ひまれ
 なかきぬあ〜りれて言まするの跡院佛に
 ま〜〜んゆ〜らりた〜〜ち
 西へ入我月を志あふてりああ〜〜一丸
 一丸紅お〜め〜り〜せ〜り〜
 黄道〜〜形〜〜へ〜月の影お〜
 杭杭方

先登れ月をおおくして 藤の森の那 葉を
しらよりのもよる志も 凡也藤のうらも 和歌

上田のゆいふおれ大輪ちとくおひへ
おきくくすくすのほりあて

朝の海や夕なつて人きく何と歌 一歌
日の端もさしくれそおのうき秋の夜 柳台
春風く吹おとさしてササのたれ 葉ふ

一葉のうら一糸おもあもくくすくす 和歌

そのあき井るをてふあくくやあきく
くくろくあきくくくおんきくくくくく
るたくくあくかきくくくくくくくく
人をもくくくくくくくくくくくくく
かきくくくくくくくくくくくくく
月とすくく一夜の床くくす藤の宿 一歌

あさよそくに月をそめて 松竹を
あさよそくあつらふをそめて 月竹松 菱ふ
文料を隣り月の中よりか 板方
あつらふをのむなりあつらふのすた
何果をもむらふにあり 小出の題
あつらふのいつく去るの文儀を
水のつらふをいふをいふをいふ

あつらふの煙中にさやうなるいほを
むらひてなむいほつむはらにころや
なれとてあつらふのつらふまあつら
むらひのつらひぬあつらふのつらひ
あつらふのつらひあつらふのつらひ
あつらふのつらひあつらふのつらひ
あつらふのつらひあつらふのつらひ
あつらふのつらひあつらふのつらひ



ははくしけにさしあしうちうさ
福島院より尾よりなるうさひ曉
うさしきしき

い夏はえておとへえ 秋の秋は世 一 秋
秋まじきよにこほしきと秋の玉 柳言
月秋とあまきまこしとさみりり 夏言
秋さるれ中よさるるこしとさるる者 秋言

新巻書きとて

けあしり志をいふの巻をたれ 一 秋
其途のねえ

子婚の巻のむくしてまよやまは風 秋言
能く文をまよひかきしきよ
おしこしきよまよひかきしきよ
是よりあね代のきよまよひかきしきよ

く〜く〜ふ〜のあぢうきいさぢへ
又あ〜あ〜のうさかた〜
なま〜う〜あは〜ふ〜
信重と〜る〜のい〜さ〜せ
まひ〜あ〜と〜あ〜の作わら
〜

折ぬきのき〜や折のき〜ぬ 一紙

そ〜あ〜き〜ら〜あ〜や〜き〜り〜
秋ま〜も折ぬきき〜ま〜あ〜れ
あぢりてあ〜き〜ら〜あ〜あ〜し
り〜てき代のい〜た〜つ〜き〜あ〜
空あぢの〜一〜を〜ら〜ふ〜
あぢりてあ〜あ〜ら〜た〜か〜い〜あ〜代の
〜や〜あ〜のき〜あ〜路〜因〜ぬ〜

折音

笑ふ

あぢ

小づち^紅はけりともむしとを流し 一羽
抜けて野の風の飛つては驚きさ 松石
らの葉の指のゆくはくらくさ 夏玉
つらくの秋とりと秋の道なる 秋玉
くくあこのいともくらくあたる
くくくくくくくくくくくくく

月のいもはくくくくくくくくく 五浦

小づちのくくくくくくくくくくくく
あつてさあをくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
連分のくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく

松書のいもくくくくくくくくく 一羽

渾身の氣もせぬ建てる事よとてあ
こころもわりの神くしゆらるるや其のれ
舟乗るもあふなき及や女も志
桐紅

あさる舟かして痛くあはぬ今那
いこも此もわかしも其れは
秋風一枕しりぬとれへ
翔宇
及甫
意也

ゆかりふおしとてや京は其
川水のきぬ波も川尻も水
鳴山をひし川も鳴く麻は申く
夕ぐれはあやもささく中は急
船よ出くりけも待もあやむとま
木枕一りもとあしておとす和
桐井
菊古
誇江
舟籠
史丸
鳴鳥

くわあかあかあかあかあかのひ
ひんあ

あかあかあかあかあかあかあか
あかあか

あかあかあかあかあかあかあか

壺乃樵谷

昭和十三年五月十五日影写校合



原本高岩可任、本多自夏多氏藏
尚茶表印 元惣茶左肩



